

ヌナーガ

エスキモーと共に十年

五月女 次男

カナダ建国より長い歴史をもっているハドソン湾会社は、今はザ・ベイという百貨店やスーパーとして続いている。とここでこのハドソン湾会社の社員は、むかしも、そして現在も、スコットランド出身者が多い。どうもスコットランド人が忍耐強く、極寒の地に暮すことに慣れているかららしい。きびしい環境でエスキモーやインディアンを相手にした商売を続けてきたハドソン湾会社の人々というものは、まことに偉いものであった。

「ヌナーガ」の作者ダンカン・ブライドもまた、スコットランドからカナダ北極にやってきて、ハドソン湾会社で働いた。この本は、彼がそこで見聞したエスキモーのリアルな生活を克明に記述したもので、なかなか面白く読めた。

アラスカとカナダのエスキモーは、過去十五年の間に大きく変わり、現在ではバフィン島の最北端に行っても、犬ゾリなどは見られなくなってしまう。ダンカン・ブライドの「ヌナーガ」は、したがって、消滅してしまつたエスキモーの狩りや生活を記録した最後の本ということになり、その意味では貴重な記録である。樹木はまるでなく、夏の間にはんのわずかに咲く極北の花以外に緑はない。まるで砂漠のような場所に、エスキモーは一万年以上も歴史をもっていたという驚き。その秘密がこの本からよく分る。エスキモーの生活の知恵のすばらしさ、きびしい自然環境にうまくとけ込む技術、そして生存の方法をこの本から学びとることが出来る。

ダンカン・ブライドは白人である。白人である作者がどのようにしてエスキモー

の信頼を得ていくか。これはたびたび極北に出かけエスキモーに接する私などには、おおいに勉強になった。

彼の描いているエスキモーの世界は、今や夢のまた夢となつてしまった。酒が入つてきて、人々は怠惰になつた。石油開発で仕事はいくらもある。収入も良くなつた。狩りのような不安な生活をしなくてもすむようになった。しかし、これでエスキモーは幸福になつたとは思わないのである。

生活が安定して、暖かい家にじつとしていられても、彼らの血は極寒の氷原に獲物を求めてさまよい歩くことを忘れない。これこそがエスキモーの血なのだ。しかし長い時間のあとには、エスキモーも完全にヨーロッパ的な社会に適合してしまつた。

だがそうであっても、極北カナダのきびしい自然は今と変わらぬ。ダンカン・ブライドはそういったエスキモーの未来をも見通しているようだ。ただし、エスキモーの同化はゆつくりがよい。グリーンランドのように。カナダでも、最近は大ゾリを再び使おうというエスキモーが増えてきている。

スノーモビルより犬ゾリの方が、極北の自然に適っている。そのことにエスキモー自身が気づいたというのは喜ばしい。

カナダ人の九十九パーセントは北極カナダに行つたことがない。従つて殆んど知らない。レゾリュートといつても、分つてくれるのは珍しい。カナダ人にとつて、極北は人間の住むところではない。そういう場所で働く人に、北極手当が得るのを見ても分る。

しかし、住めそうにもない所に、人間は二万年も前から暮らしていたのである。エスキモーと行を共にしていると思ふことが多いのは、まことに当然なのだ。こんなことに驚いたりする方がおかしいのである。私自身をも含めて、もっと彼らの知恵を学びとつて、我々の反省のよすがとしたい。(エクスベティション・サービス)

J・リツカー、J・セーウエル共著
馬場伸也 他訳

カナダの政治

ミネルヴァ書房

伊藤 勝美

本書は、著者によれば、「カナダが依つて立つ政治機構は実際どのように機能しているかを読者に理解願おうとする」ことを目的とし、「問題点に対する解答を与えるというよりは、むしろ、カナダの政治に対して新たな問いかけ」をなすことに重点を置いて書かれたものである。二名の著名なカナダの学者、J・リツカー(歴史家・教育者)とJ・セーウエル(政治学者)による本書は、カナダの政治、ひいては西欧デモクラシーの理解のために、簡にして要を得た概論的な入門書であるといえよう。

一、序言(カナダの政治形態)二、民主制度の機能 三、政党 四、カナダの議会制度 五、議会と新聞 六、オタワと州 七、ケベックとカナダ

八、州および自治体の政治 九、官僚 十、法の支配と市民の自由 十一、英米との比較(邦訳では、「カナダ憲法」抄出が巻末に付されている)。

右のうちカナダの政治を理解するのに特に重要と思われる四、五、六、七および十一を中心に本書を概観する。

まず、四の「カナダの議会制度」は、カナダの議会主義ないしは議院内閣制の成立・発展の歴史と今日における問題について論述している。しばしばカナダの政治史は、漸進主義によって特徴づけられているが、責任政府の成立を中心とするカナダ憲政史には、飛躍の契機がみられるのである。一八三七年の二つの反乱にまで発展する議会と総督・行政評議会との争い、グラム報告書に続くポールドウイン(イギリス系カナダ人)とルイ・ラフォンテーヌ(フランス系カナダ人)を指導者とするカナダ人のたたかいが、責任政府の実現をもたらしたのであった。著者はこの過程を簡潔に叙述している。現代のカナダの議院内閣制が直面している問題として、下院の地位の低下、上院のあり方とその改革の必要性、政府の情報独占による国民と政府との間の溝の深まりなどが指摘されているが、日本にも共通するものが含まれており、大いに興味をおぼえる。

次に、五の「議会と新聞」であるが、著者はマス・メディアが「政治過程のまさに必要不可欠な部分」であるとし、これに関する研究の必要を説いている。とくに新聞報道と党派性についての指摘は注目に値しよう。新聞社の見解は見解であることを明示しつつ、ニュースの選